

「2022 年度自己点検・評価結果」  
に関する評価報告書  
(概要版)

2023 年 1 月

関東学院大学 大学評価委員会

2022年度 関東学院大学評価委員会

委員長 奥 聡一郎（関東学院大学建築・環境学部教授）

委員 岩崎 達也（関東学院大学経営学部教授）

委員 三戸 浩（横浜国立大学名誉教授、長崎県立大学名誉教授）

委員 長内 紀子（横浜市環境創造局

公園緑地部公園緑地整備課担当課長）

委員 宮上 祐喜（関東学院大学後援会会長）

委員 神津 博久（関東学院大学燦葉会会員）

委員 森 賢司（関東学院大学研究推進課課長補佐）

## はじめに

大学評価委員会（以下「当委員会」という）は、2022年9月に学長より諮問を受け、2022年度自己点検・評価結果の客観性及び妥当性に関する評価を実施した。評価は、後述するように委員の分担による検討をふまえ、2回の委員会で慎重に審議し決定した。

本報告書は、その結果を取りまとめたもので、以下のように構成している。

1. 評価対象事項
2. 評価方法
3. 評価関係資料
4. 評価結果
  - (1) 全体としての所見
  - (2) 各評価対象事項の評価

2020年度に、関東学院大学は、大学基準協会による大学評価（認証評価）を受審し、適合と認定された。その後の2年に渡る当委員会の評価においても、大学基準協会からの問題点の指摘への対応も含め、大学運営に関わる各項目において概ね良好な取組みがなされていると報告されている。

しかしながら、2020年に始まる新型コロナウイルス感染症は、収束と拡大を繰り返しながら未だに世界中の社会や経済に大きな影響を及ぼしている。オンライン授業に代表される大学教育や運営にも大きな変化を与えてきたが、ようやく2023年度からは感染症対策を行いながらも通常の授業体制に戻る予定である。このコロナ禍においても建学の精神に根差した教育・研究・社会貢献等への取組みに停滞があってはならず、昨年度の当委員会報告書においては、新型コロナウイルス感染症に対する関東学院大学の教育・学習、学生の受け入れ、研究支援などへの検証も行き、十分な評価を得てきた。

今後においても、緊急時においても柔軟に対応できる大学運営、そして内部質保証の確保をはじめとする的確なPDCAサイクルを展開していくことは求められる。また、社会の大学教育に対する要求も、以前にまして厳しくなっており、その要請に応えるべく、本報告書が、今後のさらなる大学運営向上の一助となれば幸いである。

## 1. 評価対象事項

当委員会における評価対象事項は、第1回当委員会（2022年11月12日）において検討した結果、2022年度自己点検・評価について、学長から諮問された「客観性・妥当性」の観点から当委員会が評価することが妥当と考えられる以下の事項とした。

- ① 基準2（内部質保証）
- ② 基準4（教育課程・学習成果）
- ③ 基準6（教員・教員組織）
- ④ 基準7（学生支援）

## 2. 評価方法

評価は、「3」に記載の資料を基に、当委員会委員が分担して自己点検・評価結果の客観性・妥当性を一次的に評価し、第2回当委員会において全体審議し、個別評価事項及び全体的所見を取りまとめた。

評価対象事項の委員（評価者）及び委員の評価担当は以下のとおりである。

委員 (評価者)	担当基準	対象	備考
奥 聡一郎	基準 4 (教育課程・学習成果)	全学部・全研究科・ 館部センター	・「評価報告書（委員長案）」 の作成
岩崎 達也	基準 2（内部質保証） 基準 6（教員・教員組織）	全学部・全研究科・ 館部センター	
三戸 浩	基準 4 (教育課程・学習成果)	全学部	
長内 紀子	基準 6（教員・教員組織）	全学部・全研究科・ 館部センター	
宮上 祐喜	基準 7（学生支援）	全学部・全研究科・ 館部センター	
神津 博久	基準 7（学生支援）	全学部・全研究科・ 館部センター	
森 賢司	基準 4 (教育課程・学習成果)	館部センター	

### 3. 評価関係資料

- 自己点検・評価シートによる点検・評価結果一覧表
- 学習成果・教育成果の把握及び評価に関する現状確認シート
- 単位の実質化を図る措置に関する現状確認シートの内容一覧表
- 人事関連規程等現状確認シート
- 課題・問題点の確認

### 4. 評価結果

#### (1) 全体としての所見

現在の大学教育においては、教育の質保証が強く求められており、私立大学における教育の質の維持向上については、自己点検・評価及び認証評価が義務付けられている（学校教育法 109 条 1 項・2 項）。関東学院大学が一昨年度受審した第 3 期認証評価においても、教育の質保証を担保する仕組みやエビデンスの適切性が評価の中心となっており、関東学院大学は内部質保証に関して、大学基準協会から「長所」として評価されていた。

上記の認証評価制度に加え、大学内部で大学運営と教育の質を検証する自己点検・評価に関わる制度の独立性は担保されてはならない。それは、大学ごとに特色ある取組みを再点検し、不断の改善を積み重ねていく土台となる。さらに、大学における教育活動全体について社会への説明責任がなおさら重要であることを意味する。大学の理念・目的に沿った教育の場や仕組み、環境を提供し、成果をあげているかということが大学の独自性を明確にする上で重要であり、教育の質保証にもつながるものだと考えられる。関東学院大学においては、特に社会連携教育を標榜し、協働による PBL の充実が、その特色として評価されなくてはならない。

そういった内外による現状の評価を継続、また改善を進めていくためにも、まずは関東学院大学内における実施・評価・検証のためのPDCAサイクルを機能的に回すことが重要である。その上で、学内委員と学外委員を交えた当委員会による評価が意味のあるものになる。内発的自律と客観的視点が、関東学院大学の運営や教育の質を高める助けとなると考えている。

## ① 関東学院大学の自己点検・評価方法

以上を前提に、関東学院大学の自己点検・評価のシステムを確認すると、膨大に及ぶ点検・評価項目について、大学自己点検・評価委員会が統括しながら全学一体となって、「自己点検・評価シート」を活用し取り組んでいることは、次の3点から高く評価できる。

すなわち、1点目は多部署にわたる点検・評価項目の評価が一般化・平準化されることである。この点は、内部チェックでありがちな偏った評価を避けることが可能になる。2点目は的確なPDCAサイクルの展開である。自己点検・評価は、ともすれば評価する手段や行為自体が目的化されてしまい、形式的に報告書をまとめることに注力される結果、それが次に活かされない。同シートをもとに「GPリスト」と「タスクリスト」に抽出し一覧表として可視化することで、GPについてはさらなる伸長点が、タスクについては改善しなくてはいけない点が明確になる。それを、次年度に取り組むべきテーマや課題としてPDCAサイクルに組み込むことで、よりよい改善のサイクルとすることができる。3点目は点検・評価作業の効率化である。

大学は教育、研究、社会貢献などはじめとして、社会の動静に応じた具体的取組みを展開しなくてはならない。近年は、新型コロナウイルス感染症への対応を始めとして、ウクライナ情勢によるエネルギー問題、急激な円安による経済状況の悪化など、緊急の対応を要する課題が山積している。この中で、自己点検・評価のウェイトが高まり過ぎると、現場対応の人的資源が確保できない事態や評価疲れや徒労感による本来の教育活動に影響を及ぼすことがあり得る。こういった点においても自己点検・評価の省力化と効率化は重要な観点であろう。

## ② 当委員会の評価のあり方について

### ア 評価項目

2022年度は、当委員会での評価項目として、大学として今後注力したい内容に関連する基準である基準2（内部質保証）、基準4（教育課程・学習成果）、基準6（教員・教員組織）、基準7（学生支援）に絞って行った。今後も評価時点において関東学院大学を取り巻くさまざまな状況等に鑑み、必要な視点から評価をすることが望ましいと考える。

### イ 評価方法

当委員会は、前述のとおり事務局から提出を受けた「3」に記載の資料を基に、各委員が基準ごとに担当し評価している。その後、各学部・研究科等に委員の評価案を示し、その内容・評価に関する齟齬についての調整を行った。そうすることで、評価案に事実誤認があったり、関東学院大学側に異議があったりする際の評価案の正確性・妥当性を担保するに資するものになり、報告書の精度を確保している。

## ウ 評価体制

当委員会は、大学基準協会による認証評価と学内による自己点検・評価の中間的な位置付けにあり、内部の運営や体制を理解しつつ、評価の客観性を維持する立場にある。また、毎年の評価作業と、学長方針を学内外に齟齬なく伝え、スピード感を持って進めるためにも委員長が学内者であることが現状では最も機能的な形であると考え。また、委員長は全体の評価案をまとめる役割にはあるが、各基準の評価に関しては、担当となる委員の判断に全面的に委ねられている。そういった意味では、完全ではないが評価の客観性は保たれていると判断できる。

### ③ 学生支援の重要性

新型コロナウイルス感染症への対応に始まる社会情勢の大きな変化のなか、各学部・研究科、館・部・センターは、教育・研究の質担保のためにその都度の迅速な対応を強いられた。しかし、その基本は学生支援であり、大学として学生の学びの支援を徹底して行わなければならない。

コロナ禍では、大学施設のデジタル対応の充実や教員のデジタル機器への対応、オンライン授業の体制整備など評価できる多くの点を見いだせた。そして、その後の社会情勢の変化に対応して、教育の受け手である学生のニーズを把握し、学習効果の最大化や学生生活の満足度を向上させることが重要である。こういった流れの中、今年度の関東学院大学自己点検・評価では、新たな時代に備えた教育環境整備に加え、継続的な学生支援について重点項目として評価項目に加えられている。

## (2) 各評価対象事項の評価

評価対象事項の評価は、以下のように取りまとめた。

「i 点検・評価項目に関する評価等」については、当該項目に照らし取組みの客観性・妥当性の評価及び評価の前提となる所見を示している。

「ii 課題・問題点の認識」については、各委員から客観性・妥当性にかかわる指摘は特になかった。問題ないものと評価している。

「自由記述」については、各委員の自由意見を列挙している。

## ① 基準2（内部質保証）

### i 点検・評価項目に関する評価等

点検・評価項目①： 内部質保証のための全学的な方針及び手続を明示しているか。	
当委員会評価	内部質保証の全学的方針・手続が適切に明示されている。

点検・評価項目②： 内部質保証の推進に責任を負う全学的な体制を整備しているか。	
当委員会評価	内部質保証の全学的責任体制が整備されている。

点検・評価項目③： 方針及び手続に基づき、内部質保証システムは有効に機能しているか。	
当委員会評価	内部質保証システムが概ね有効に機能している。
当委員会所見	<ul style="list-style-type: none"><li>・評価の視点4：専任教員のWebによる自己点検に関しては、各学部・研究科における取り組みへのばらつきがあり、改善の余地がある。</li><li>・評価の視点5：点検・評価結果に基づく改善・向上に関しては、国際文化学部、経営学部、建築・環境学部のように組織的に内部質保証の実質化や将来のアクションプランへの対応などを積極的に行う組織がある一方、まだ具体的施策には至らない学部・研究科もあり、速やかな対応が望まれる。</li></ul>

点検・評価項目④： 教育研究活動、自己点検・評価結果、財務、その他の諸活動の状況等を適切に公表し、社会に対する説明責任を果たしているか。	
当委員会評価	適切に公表しており、社会に対する説明責任が果たされている。

### ii 課題・問題点の認識

当委員会評価	妥当である。
当委員会所見	<ul style="list-style-type: none"><li>・点検・評価結果に基づく改善・向上に関する取り組みに関して、各学部における対応への差があり、実施状況もまちまちである。学部間での連携など、横のつながりの強化も望まれる。</li></ul>

② 基準4（教育課程・学習成果）

i 点検・評価項目に関する評価等

点検・評価項目①： 授与する学位ごとに学位授与方針を定め、公表しているか。	
当委員会評価	学位授与方針を定め、適切にホームページで公表し、履修要綱で学生に周知されている。

点検・評価項目②： 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。	
当委員会評価	教育課程の編成・実施方針を定め、適切にホームページで公表し、履修要綱で学生に周知されている。

点検・評価項目③： 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
当委員会評価	適切な授業科目を開設し、体系的な教育課程が編成されている。

点検・評価項目④： 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
当委員会評価	学生の学修の活性化につながるるとともに、効果的な教育を行うことができる様々な措置が概ね講じられている。
当委員会所見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学生の主体的参加を促す」に関して、国際文化学部・法学部・理工学部など5学部では、全授業形態での状況が記載されているが、一部授業だけ行っている学部が散見される。文系学部などの大人数授業における主体的参加は難しいことはわかるが…。</li> <li>・「授業の履修に関する指導」はすべての学部でなされているようだが、丁寧さに差があるようである。オリエンテーション以外にゼミなどの個別相談・指導が必要な学生も多くなっているのでは…。</li> <li>・点検・評価結果を見る限り、各インスティテュートで整備している目的、方針等に統一感が無いように読め（例えば3つの方針を設定しているインスティテュートもあればないところもある）、それぞれのインスティテュートが示している目的、方針等は、学生に対して統一感を持たせて明示されていることが望ましい。</li> <li>・インスティテュートの設置に関し、大学全体としてどのような理念・目的を持って設置しているかの記載がなかったが、今後の全学内部質保証推進組織との関わり（教育の実施内容・状況の把握等）を考えると、全体的な方針を踏まえた上で、各インスティテュートが運営され、点検・評価が行われることが望まれる。さらに、現状のキリスト教、グローバル、スポーツという3分野での展開や、各学部との有機的な連携などを将来的に見直す際にも、当初の全体的な方針を示しておくことが期待される。</li> </ul>



点検・評価項目⑤： 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
当委員会評価	成績評価、単位認定及び学位授与が適切に行われている。

点検・評価項目⑥： 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
当委員会評価	全学、学部、大学院のいずれも学生の学習成果を適切に把握したうえで、評価している。

点検・評価項目⑦： 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取組みを行っているか。	
当委員会評価	教学マネジメント委員会が中心となって定期的に点検・評価が行われたうえで、適切に改善・向上に向けた取組みが概ね行われている。
当委員会所見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「教育課程の点検・評価」に関して、授業改善アンケートの利用の記述はあるが、その他アンケートも含めて回答率アップの必要性やそのための工夫をし、積極的利用に取り組むよう努めることが望ましい。</li> <li>・キャリア教育科目については各学部の要望や社会環境の変化に対応するための改善が図られ、適切な取組みが行われている。一方で、継続的な改善が図られるよう、教育課程を編成している各学部との連携体制を整備することが期待される。</li> </ul>

## ii 課題・問題点の認識

当委員会評価	妥当である。
当委員会所見	特になし。

### ③ 基準6（教員・教員組織）

#### i 点検・評価項目に関する評価等

点検・評価項目①： 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	
当委員会評価	大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針が明示されている。

点検・評価項目②： 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	
当委員会評価	教員組織の編制に関する方針に基づき、概ね適切に教員組織が編制されている。
当委員会所見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価の視点2：各学部・研究科においては、採用にあたり資格や経験などを考慮し、学部・研究科の基準に則って厳正に対応しているが、男女比や年齢構成比、国際性なども考慮した取り組みが求められる。</li> <li>・充足されている学部・研究科等では、充足されているとの評価にとどまり、充足率を大きく上回っていることへの評価がない。大学として上限についての規定が必要ではないか。</li> <li>・研究科の担当教員における資格の明確化がなされておらず、分かりにくい。</li> <li>・バランスのとれた年齢構成に配慮した教員配置については、概ね適正配置となっているが、30代がない又は、非常に少ない割合となっている学部も見受けられる。</li> <li>・学部における共通科目の運営体制について、各学部の編制方針に記載のない学部も見受けられた。</li> </ul>

点検・評価項目③： 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	
当委員会評価	教員の募集、採用、昇任等が適切に行われている。

点検・評価項目④： ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。	
当委員会評価	ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動を実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上に概ねつなげられている。
当委員会所見	・評価の視点1：ただし、「授業改善アンケート」の回収率の問題、またその活用においては改善の余地があるとの指摘がなされている。対応が望まれる。

#### ii 課題・問題点の認識

当委員会評価	妥当である。
当委員会所見	特になし。

④ 基準7 (学生支援)

i 点検・評価項目に関する評価等

点検・評価項目①： 学生が学習に専念し、安定した学生生活を送ることができるよう、学生支援に関する大学としての方針を明示しているか。	
当委員会評価	学生支援に関する大学としての方針が明示されている。

点検・評価項目②： 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。	
当委員会評価	学生支援体制が整っており、適切な学生支援が概ね行われているが、一部学部の記載内容が不十分であったため、評価が難しい項目があった。
当委員会所見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツセンターは、授業形態の多様化等により、学生同士や学生と教員の人間関係の構築につながる機会を提供するなどの取組みについて、適切に実施していると評価できる。今年度、特に強化クラブに関して、大変厳しい結果であったと認識している。来年度に向けて、学生と指導者がコミュニケーションをとり、良い人間関係の構築ができることが良い成績に繋がる一歩だと思うので、引き続き、サポートをお願いしたい。</li> <li>・留学生等に対する日本語能力は修学意欲に影響するため、修学支援を早期に整えることを望む。</li> <li>・退学者数及び年間の退学率を指標管理しているが、退学者の分析及び改善について学部ごとに差があるように感じる。成績不振による退学に対しては、国際文化学部が今後取り組む学校推薦等入学時のミスマッチや習熟度学習、理工学部の入学当初に行う高校数学テスト及び補習教育手法の導入など学ぶべきことが多い。学部間で情報を共有しながら退学者数の減少に務めていただきたい。</li> <li>・学生の心身の健康が重要であり、1年生が履修するメンタルヘルスの講義は大変有効である。できるならば、卒業後社会人になった時に心身のバランスを壊す人が多いため、卒業前の4年生にもカウンセラーの講義が受けられるように検討してもらいたい。</li> <li>・就職支援に関するキャリア教育では、資格所得の受験料支援を行う学部、職業体験及びOBによるガイダンスを行う学部などそれぞれに工夫されている。今後、就職後の短期離職率の高い業種など、個々の学生が適応できる職種へのマッチングなど検討していただきたい。</li> </ul>

ii 課題・問題点の認識

当委員会評価	妥当である。
当委員会所見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・退学者数及び年間の退学率を指標管理しているが、退学者の分析及び改善について学部ごとに差があるように感じる。成績不振による退学に対しては、国際文化学部が今後取り組む学校推薦等入学時のミスマッチや習熟度学習、理工学部の入学当初に行う高校数学テスト及び補習教育手法の導入など学ぶべきことが多い。学部間で情報を共有しながら退学者数の減少に務めていただきたい。</li> </ul>

## 自由記述

当委員会所見	<ul style="list-style-type: none"><li>・内部質保証の全体のシステムはよくできているが、その実質化と進化させていく各学部・研究科での継続的な取り組みが望まれる。</li><li>・科研費など競争的資金獲得への積極的参加。学部による温度差の解消を。</li><li>・関内キャンパス開設を大学のブランドイメージ向上の機会に。また、リカレント教育への取り組みの強化。</li><li>・授業改善アンケートの見直しを行う場合は、回収率の向上が図られることを期待したい。</li><li>・本大学の教員組織の編制方針で、特定の年齢層に偏ることがないように配慮するとともに、教育研究上の目的を踏まえて、国際性や男女比等にも留意し、教員組織を編成するとあることから、年齢層だけでなく、男女比（女性率）を示してほしい。男女比は直接適切かどうかの問題ではないが、教員組織の編制に配慮されているかどうかの指標になり、学生の男女比との比較にも活用できる可能性がある。</li><li>・各学部・各研究科だけでなく、今後はインスティテュート単位での自己点検・評価を行う必要があると思われる。</li><li>・学部間の連携に関わる自己点検・評価を行う箇所がないため、学部レベルの教育課程の自己点検・評価に終始してしまう恐れがあると思われる。</li><li>・課題・問題点を確認した際に、学内で実施されている各種のアンケートや調査の結果を踏まえた課題の記載が見当たらなかった。認証評価において指摘を受けたような課題・問題点だけではなく、重要度は少し下がっても、そのような課題が抽出されていてもよいのではないかと思う点があった。（基準4 教育課程・学習成果 館部センターを担当）</li><li>・「自己点検・自己評価」の「大変さ、面倒くささ」は大いに理解、共感いたします。ご苦労様です。このような作業をしなければ、大学への信頼もありますが、（社会環境は激変したにもかかわらず）長年変わらないままにきた大学教育に対して、社会（産業界・企業等）が有為な人材を送ってくれ、という要求だと思います。大学・教員の努力が通じない学生も多いことも理解しているつもりですが、放っておいたら、きちんと学ぶことができない学生が偏差値の高低を超えて出てきています。教育課程を組織的・体系的に見直す必要があり、適切な改善は教育成果に結びつきますので、大学教育への期待にお応えください。</li><li>・「評価の視点」とその下に書かれている記載事項に沿っていない回答が結構あった。「具体的事例を」と指示されているのに、記述されていないことが多かった。</li><li>・学校への要望は、負けず嫌いを育てる。</li><li>・関東学院大学の卒業生はみんな社長を目指す。</li><li>・キャリアデザインが描けるように育ててもらいたい。</li></ul>
--------	---

以上